

平成 21 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手スタートアップ

研究期間：2007～2008

課題番号：19820037

研究課題名（和文） 旅順と沖縄の戦跡を巡る近代日本の国民国家化に関する研究

研究課題名（英文） Research into the process of establishing postwar nationalism through the battle sites of Port Arthur and Okinawa

研究代表者

北村 毅（KITAMURA, Tsuyoshi）

早稲田大学・高等研究所・助教

研究者番号：00454116

研究成果の概要：単著『死者たちの戦後史 沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』を著し、本研究課題の成果の一部として 2009 年 6 月に刊行予定である。同書の執筆と並行して、旅順の戦跡に関する調査研究を進め、関連資料の収集や現地調査を行った。以上の研究成果を踏まえ、日露戦争と沖縄戦を巡る記憶を多層的かつ相関的に検証することが可能となり、新たな戦争の記憶論、戦死者表象論、国民国家論、ナショナリズム論、戦後論の展開に向けて端緒を開くことができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,260,000	0	1,260,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,060,000	240,000	2,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：沖縄、旅順、沖縄戦、日露戦争、戦跡、国民国家、ナショナリズム、戦争の記憶

1. 研究開始当初の背景

近年、戦争の記憶が表象され、戦死者が記念・顕彰される場や空間についての研究（「戦争の記憶論」、「戦死者表象論」）が、歴史学、地理学、民俗学、文化人類学、社会学、国際政治学などの分野から数多く発表されている。

当該研究領域は、1980 年代以降の国民国家論の興盛の中で、いわゆる「想像の共同体」論の延長として立ち上げられた。その研究動機には、国家によるコメモレーション（記念＝顕彰行為）に対する再検討がある。その目

的は、近代国家が、戦争の記憶の社会化・共有化を通して国民統合のシンボルを創り出すことにより、国民国家のアイデンティティを構築していった過程を検証することにあった。

研究代表者は、このような研究動向の中で、戦争の記憶の表象や戦死者の慰霊・顕彰が、近代日本の国民国家化（nationalization）にどのような役割を果たしてきたのかをテーマとして研究活動を進めてきた。

特に沖縄をフィールドとして、戦跡（慰霊塔・碑や「ガマ」と呼ばれる自然洞窟）において行われる様々な実践を参与観察し、さら

には資・史料からその歴史の変遷過程を再構成し、一連の研究成果に表してきた。

2. 研究の目的

本研究課題は、ふたつの戦争 日露戦争と沖縄戦 を巡る記憶を相関的かつ動的に検証することによって、近代日本の国民国家化のプロセスを明らかにしようとするものである。

その作業のために、両戦争の象徴的な記憶の場である、旅順の戦跡と沖縄の戦跡に関する膨大な言説を分析対象とする。戦跡という場・空間においていかなる実践が行われ、それらの実践を通して近代日本の国民国家化がいかに果たされていったのか、慰霊・顕彰、教育、観光、メディア、コロニアリズム、ナショナリズムを巡る言説の絡み合いを紐解く中で検討する。

まず、研究代表者による沖縄の戦跡を主題とする研究を完成させ、単著『死者たちの戦後史 沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』（応募内容ファイルの『廃墟と暴力 死者たちの戦後史』より改題）として、御茶の水書房より刊行する。並行して、沖縄の戦跡に関する研究成果を踏まえつつ、本研究課題では、さらなる研究対象と研究視角の拡張を試みる。

すなわち、沖縄の戦跡に関する研究と並行して、旅順の戦跡を主題とした研究が進められる。本研究課題の目的の第二段階は、旅順の戦跡を巡って、新興国家「大日本帝国」が、日露戦争の記憶をどのように有効活用し、人々に国民としての意識を醸成し、近代国民国家を形成していったのかを明らかにすることである。その検証作業においては、研究代表者が、沖縄の戦跡を巡って展開してきた研究アプローチが有効に働くはずである。

以上の研究代表者による沖縄と旅順の戦跡に関する一連の研究成果を踏まえた上で、両者の比較研究を試みる。戦前と戦後の二つのナショナリズム、すなわち、「勝った戦争」である日露戦争後のナショナリズムと「負けた戦争」である沖縄戦後のナショナリズムの相関関係を明らかにすることが最終的な目的となる。

3. 研究の方法

本研究課題の調査研究は、沖縄と旅順における現地でのフィールド調査を踏まえた文化人類学的アプローチと、公文書や統計といった資・史料を通時的に検証する歴史学的アプローチを併用しつつ実施された。

旅順の戦跡に関しても、沖縄の戦跡に関す

る研究同様、旅順を主とした日露戦争関連の戦跡に関する資・史料を収集し、それらの言説を詳細に分析した上で、日露戦争後に旅順の戦跡で行われていた諸実践の全体像を明らかにする研究過程を経た。さらに、後述するように、中国の大連市旅順口区などに残された日露戦争関連の戦跡のフィールド調査を行った。

現地でのフィールドワークを行わなければならなかった理由は、旅順戦跡の現状の踏査という以上に、日露戦争後からアジア・太平洋戦争終結までの旅順の戦跡空間を理解するために必要であったからである。

研究代表者は、多年に及ぶ沖縄の戦跡でのフィールドワークから、たとえ過去の言説を対象とする研究であっても、その空間的・地理的配置を十全に理解していなければ、無数の言説の中から、当該実践の全体像を描き出すこと、そしてそこに展開された政治力学を看取することは困難であると考えた。旅順戦跡を巡る空間的・地理的コンテクストを理解した上で、そこで行われていた実践の実態を動的に検証するためにも、フィールド調査は不可欠であった。

4. 研究成果

(1) 沖縄の戦跡に関する調査研究

まず、本研究課題の成果として、「研究の目的」の項で前述した単著『死者たちの戦後史 沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』（2009年6月刊行予定）が挙げられる。

本書では、フィールド調査を踏まえた文化人類学的アプローチと、公文書や統計といった資・史料を通時的に検証する歴史学的アプローチを併用しつつ、「慰霊」「巡礼」「観光」などの多様な側面から戦跡を巡る諸実践を扱い、沖縄の「日本復帰」を巡る戦後の日本ならびに沖縄におけるナショナリズムの構築過程を明らかにした。

本書において、研究代表者は、戦跡を巡る国民国家化のエージェンシーとして、日本政府や琉球政府といったマクロなレベルだけではなく、慰霊や観光や視察に訪れた人々といったミクロなレベルにも着目した。すなわち、「本土」からの戦友会や遺族会、観光客、文化人などを主体とした戦跡を巡る実践や言説を再検討し、それらが「戦後ナショナリズム」の形成に果たした役割について動的に検証したことに、本書の独自性がみられよう。

本書において明らかになったことは、戦跡という場が、戦争の記憶が生産される場であると同時に、消費される場であったということである。すなわち、そこを訪れる者は、戦

争の記憶の消費者であり、かつ生産者でもあった。従来の沖縄の戦跡に関する研究は、戦跡訪問者を単なる消費者としてしか捉えていなかったが、研究代表者は、戦争の記憶を主体的かつ積極的に再生産していくアクターとして彼らの実践的な関与を分析した。

国家による上からの「支配的物語」(マスター・ナラティブ)の単純な押しつけではなく、戦跡を巡る人々の実践的営為によって、下からの国民国家化がいかに果たされたのかという、沖縄戦跡の調査研究の主眼となった研究代表者の研究アプローチは、後述する旅順戦跡を巡る研究においても十全に活かされた。

本書は、沖縄の「日本復帰」に作用していた戦死者表象の政治力学について論じたものであるが、戦死者をエージェントとした「復帰運動」という今までにない視点から戦後日本の国民国家化を分析したことに特徴があるといえよう。

さらに、「復帰」前と「復帰」後の「本土化」を巡る沖縄と日本の相互作用の中で、沖縄のローカリティやローカル・アイデンティティが構築されていった過程についても論じている。一方で、沖縄の戦跡が、本土側の戦後ナショナリズムを表象する場となった過程についても詳細に検討した。

以上、本書によって、新たな戦争の記憶論、戦死者表象論、国民国家論、ナショナリズム論、戦後論の展開に向けた礎がなされたといえ、その学術的意義は大きい。

なお、同書の執筆に付随する沖縄調査については、2007年9月、同年10月～11月、2008年3月に沖縄現地にて行い、貴重な資料や調査データを多数収集することができた。

その概要を示すと、沖縄戦の語りの実践や慰霊実践の参与観察、これら関係者への聞き取り、沖縄戦関連の各種イベントへの参加、戦争体験者や遺族の戦後体験を中心としたオーラル・ヒストリーの採取、公文書や証言記録等の資・史料の収集(於・公文書館、図書館、市町村史編纂室他)などの多岐にわたり、現地関係者とのラポールを築きながら進められた。

(2) 旅順の戦跡に関する調査研究

拙著『死者たちの戦後史』で展開した「戦死者表象とナショナリズム」の議論をさらに発展させるために、本書の執筆と並行して、旅順の戦跡に関する調査研究が進められた。

まず、2007年度より、以下のような基礎的な資・史料の収集を幅広く行った。旅順を中心とした日露戦争の戦跡に関する公文書、ガイドブックや写真資料、各種戦跡訪問(遺族や在郷軍人会の慰霊巡拝、修学旅行、教員や議員等の研修、大学生や知識人等の視察)の

事前資料や事後報告、新聞記事、雑誌記事などである。

特に、2009年3月に奈良県と大阪府において行った調査では、奈良県立図書館情報館の戦争体験文庫や大阪府内の高校などを巡り、貴重な資料を多数入手することができた。

2009年3月には、中国の大連市旅順口区において現地調査を行った。近年まで外国人が入域を許されなかった場所で調査を実施する重要な機会を得たとはいえ、外国人に対する旅順口区の全面開放は研究期間内に実現せず、すべての戦跡の調査はかなわなかった(現地にて、近年中に全面開放されるとの情報を得たので、旅順におけるすべての戦跡の踏査は今後の課題としたい)。

2009年3月に旅順口区で行った調査で、研究代表者が重点的に調査することのできた戦跡は、以下の通りである。

水師営会見所(写真1参照)

203高地(写真2・3参照)

東鶏冠山(写真4・5参照)

日露戦争陳列館



写真 1



写真 3

写真 2



写真 5



写真 4

以上に挙げた戦跡については、戦前期の旅順における戦跡の分布（配置）との地誌的な比較検証作業を試みることができた。

現存する戦跡だけではなく、大連市街や旅順口区において、旧日本軍の関連施設、戦跡の旧所在地、大日本帝国時代の旧跡、文書館などの調査を行った。

以上の調査研究を通して明らかになってきたことは、戦跡という場所が、植民地政策、文化政策、産業政策、都市計画などの国家政策が空間的に表象される場として、さらに、人びとの内面形成の場（既存の宗教や道徳が援用されつつナショナルな主体性が喚起される）として利用されていたことの詳細である。本研究課題の研究開始時に指定した慰霊、観光、巡礼といった視点に加えて、多くの新発掘の資・史料により、新たな研究視角を導入することができた。

旅順における調査では、旅順戦跡の全体を調査することはかなわなかったとはいえ、数多くの貴重な資・史料を入手し、戦跡をめぐるナショナリズムがどのように展開されているのかという問題に対して、新たな知見を用意する現在進行的な調査データを得ることができたことは特筆に値しよう。

特に、現時点における旅順戦跡の観光地や教育施設としての使用状況については、現代中国が「戦争の記憶」をどのように活用し、国民的な記憶を形づくっていったのかという新たな問題を提起し、今後の発展的な研究課題ともなる重要な示唆を得た。

(3) 今後の展望

以上に記した旅順の戦跡と沖縄の戦跡に関する調査研究を踏まえた上で、研究代表者は、日露戦争後と沖縄戦後に形成されたナショナリズムの相関関係を検証した。ただし、この作業は、いまだ進行中のものであり、近年中にいくつかの研究成果にまとめる中で、新たな理論的見地を提示することになるだろう。

戦跡という空間とそこで行われる実践を題材として、歴史人類学的なアプローチから、日本の近代化を国民国家化やナショナリズムとの関わりで問い直す実証的な研究は、これまでほとんどみられず、本研究課題の学術的な意義は大きいといえる。

今後の研究展開としては、戦跡を巡る国民国家化のプロセスの比較文化的研究が挙げられる。本研究課題では、旅順や沖縄の戦跡が日本以外の国民にとって、どのように記憶されているのかといった側面から調査研究を行うことができなかった。

前述した中国における調査では、旅順の戦跡が、中華人民共和国という国民国家の「聖地」と化している現状について知ることになったが、そのことについては、今後さらなる調査研究が求められる。

さらに付け加えるならば、本研究課題では沖縄と旅順の事例に限られたが、アジア諸国やヨーロッパ諸国との通文化的検証作業も必要となるであろう。近代国民国家における戦跡の位置づけを、慰霊・顕彰、教育、観光、メディア、コロニアリズム、ナショナリズムを巡る言説の絡み合いの中で、多くの事例から複合的に研究していくことの必要性を強調しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

北村毅、戦死者遺骨のナショナリティ
1952年の沖縄をめぐる「遺骨野ざらし」
問題、琉球・沖縄研究、第2号 41-56頁、
2008年、査読有

〔図書〕（計1件）

北村毅、御茶の水書房、死者たちの戦後史
沖繩戦跡をめぐる人びとの記憶、
2009年6月刊行予定、全約440頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 毅 (KITAMURA TSUYOSHI)

早稲田大学・高等研究所・助教

研究者番号：00454116